

## 山口県下松市の住みやすい要因について

福岡大学大学院工学研究科1年 小田将太郎

### 1. はじめに

山口県の東南部に位置する下松市は、瀬戸内海に面する臨海業都市として発展してきた。大正時代から鉄道、船舶関連からハイテク機器関連まで幅広い製造業が盛んな「ものづくりのまち」として発展して、その高い技術を世界に発信している。また、東洋経済新報社が毎年発表する「住みやすさランキング2021」では、全国で10位と住みやすいまちとして評価されている。加えて、人口増減率では、山口県で唯一増加している。これらの要因として商業施設の充実や、利便性が良いことが言われている。そのため、下松市の住みやすい要因を明らかにしていく。

### 2. 人口の分布

下松市の昼間人口を図-1、夜間人口を図-2に示す。図-1と図-2より昼間の人口と夜間人口で大きな差はみられないため、働く場所と住む場所が近い距離にあり、コンパクトな町であることが分かる。

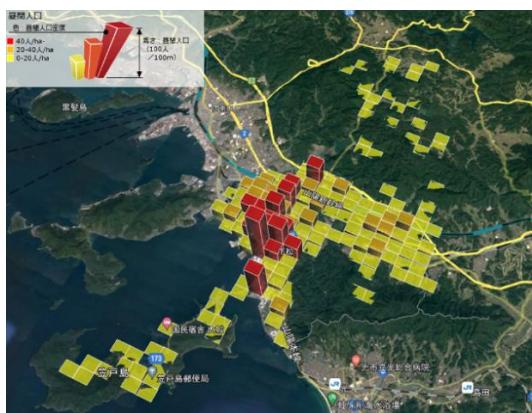


図-1 昼間人口

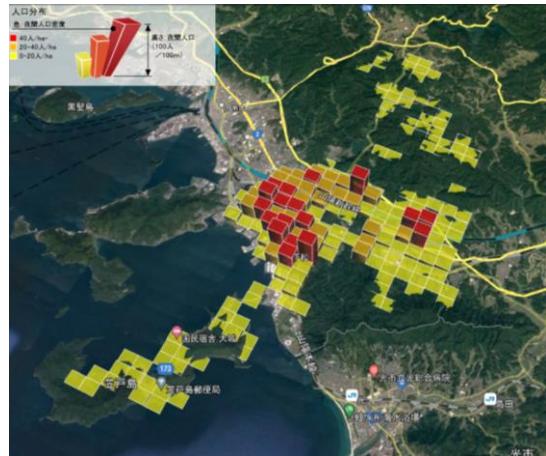


図-2 夜間人口

### 3. 産業について

第一次産業について図-3、耕作放棄地の分布を図-4に示す。図-3より、下松市では、山地、平地ともに第一次産業就業者総数の密度は小さいことが分かる。図-4より耕作放棄地は、山間地で多くなっていることが分かる。このことより山間地は、現在より第一次産業が盛んであったと思われる。しかし、下松市の第一次産業の割合は低いと考えられる。

図-5は1975年の第二次産業従業者数の密度、図-6に2014年の第二次産業授業者の密度を示す。1975年は、笠戸島と臨海部で密度が高くなってしまっており、2014年では、笠戸島の密度は小さくなっているが、臨海部の密度は、高い数値を保っている。

図-7は1975年の第三次産業従業者数の密度、図-8は、2014年の第三次産業従業者数の密度を示す。1975年は、笠戸島、平

地で密度が高くなっている。2014年は、笠戸島の密度は小さくなっているが、平地の密度が高い範囲は広くなっている。



図-3 第一次産業従業者数の密度  
(2010年)



図-4 耕作放棄地の分布 (2015年)



図-5 第二次産業従業者数の密度  
(1975年)



図-6 第二次産業従業者数の密度  
(2014年)



図-7 第三次産業従業者数の密度  
(1975年)



図-8 第三次産業従業者数の密度  
(2014年)

#### 4. 商業施設について

小売業の販売額について1979年と2010年の比較を行い、商業の充実について比較を

行う。

図-9に1979年の小売業年間販売額、図-10に2010年の小売業年間販売額を示す。1979年から2010年にかけて小売業販売額が増加していることより、商業施設が充実し、利用客が増加していると思われる。



図-9 小売業年間販売額（1979年）



図-10 小売業年間販売額（2010年）

## 5. 公共交通機関について

下松市の利便性について公共交通利用圏のデータを用いて比較を行う。図-11に公共交通利用圏と人口分布の図を示す。図-11より、下松市の広い範囲で電車とバスの利用圏であり、笠戸島、山間部でもバス利用圏となっており、下松市のほとんどどのエリアで公共交通利用圏となっていることが分かる。このことより、下松市の利便

性は良いことが分かる。

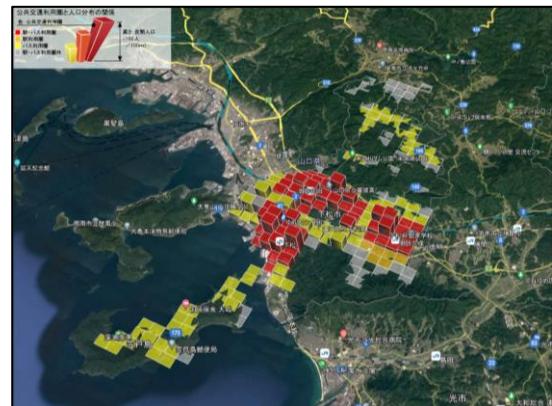


図-11 公共交通利用圏と人口分布

## 6. まとめ

昼間人口と夜間人口、産業、小売業年間販売額、公共交通圏のデータを基に下松市の住みやすさの検討を行った。まず、昼間人口と夜間人口は変化が小さいことより働く場所と住む場所の距離が近いと思われる。そのため、出勤に要する時間が首都圏のベットタウンと比べると短いことから相対的にストレスが少なく住みやすい街であるといえる。産業は、第二次産業の変化が小さいこと、第三次産業の人口密度が少し大きくなっていることより、働く場所が常にあることがわかる。また、小売業年間販売額は、1979年から2014年で増加しており、商業施設が増加し、満足度が高いと思われる。公共交通利用圏と人口分布より、駅とバスの利用者のエリアが広く、利便性が良いことが分かる。以上のことが一部ではあるが、下松市の住みやすい要因であると思われる。